

# 仮設サロンを通して学ぶ 「仮設後の生活に繋げる支援のあり方」

特定非営利活動法人 支えあう21世紀の会  
〒164-0012 東京都中野区本町2丁目35-5

## 助成事業の概要

＊2016年度中には全仮設解体のニュースが流れる中、徐々に地元への帰還が始まった様子もあるが、実際はまだまだ仮設を離れられない人々も多く残っている。これまでの「被災者支援は正しかったのだろうか」自分たちの支援のあり方を検証するために、仮設サロン活動を通して、避難生活を送る人々の話に耳を傾け、このような家族や地域がすべて崩壊するような大きな災害に、自分たちが行ってきた支援活動を検証したいと取り組んだ。

6月13日

東日本復興コンサートと3・11を語る会『希望の明日に心をつなごう』

「東日本大震災を風化させないこと」を当会の、特に東京での役目と考えている。

現地から離れ「3・11」を遠く感じている会員、また多くの東京人に、富岡町の3・11を語る会代表の青木淑子さんの映像と語りで津波と原発事故の被害を受けた富岡町の実情を、誰にでも分かりやすくお話しいただいた。当会セミナーの特徴として、コンサートを同時開催の形をとって、一人でも多くの方々に、社会福祉の課題を広報する努力をしている。

6月27日

「震災支援のあり方研究会」・(明治大学リバティータワー)

福島大学経済経営学類特任教授 清水修二先生に

基調講演『原発事故と被災者支援・家族・子ども・地域の視点から』をお話しいただき、概ね月1回の福島でのサロン活動での実践活動と、研究会（会長元明治学院大学社会福祉学科教授根本博司）を重ねる中で、福島の実態について取り組みを始めた。

7月18日

「被災者支援の在り方研究会」開催

研究会の目的・趣旨の確認：研究の方法としては「被災者はアンケートにより調査にはアレルギー的反応を示すだろう」という清水教授からのアドバイスがあり「被災者の体験事例を伺う中で、課題について話し合っていく」形を取ることにする。

7月20日

(郡山市川内村・富岡町仮設でサロン開催) カレーライス作り・スポーツ民謡・

7月21日

福島大学に清水教授を訪ねる。研究方法として「懇談会方式にして、なるべく多くの人の声を聴く」形の提案があり、ご自身も「是非、参加したい」との意向を示された。同日（福島市の浪江町仮設により、同所で始まった福島大学の「仮設に住むボランティア」の応援を依頼した。

8月21日

「被災者支援のあり方研究会」

8月22日

(郡山市川内村・富岡町仮設サロン開催) 郷土料理じゅうねんを使っのソーメン

11月26日

{支援のあり方研究会}・デンマーク・セミナー報告と、南相馬の障害者事情

9月13日

(郡山市川内村・富岡町仮設サロン開催) チラシ鯨づくりと清水先生懇談会

12月5日

(東京中野区鷺宮住宅・子供達とのサロン) アップルパイ+キャンドル・スタンドづくり

9月18日

(福島市・浪江町仮設) おはぎづくり、浪江町懇談会・清水先生出席

12月8日

(南相馬小規模作業所「えんどう豆」訪問)・震災時の障害者への支援については後手に回り、家庭ではどうすることもできない障害者は家にこもるしかない状態になった。そこで、南相馬市では、制限解除されないまま作業所を再開、小規模作業所を連携させて代表者が仕事を受注して、各作業所にわせる方式をとった。

10月3日

「被災者支援のあり方研究会」経過報告と事例検討

【震災によって生まれた作業所の新しいあり方】

10月12日

(郡山市川内村・富岡町仮設サロン開催) イチジクジャムづくり+スポーツ民謡)

12月11日

「被災者支援のあり方研究会」中野サロンの報告・会計報告

11月3日

(デンマーク・セミナー開催・郡山市ビックアイ)デンマーク在住澤渡夏代さん講演会)

12月19日

(郡山市川内村・富岡町仮設サロン) クリームシチュー+キャンドル・スタンドづくり  
川内村社会福祉協議会との打ち合わせ・来年度以降についても活動継続の依頼があった。

11月4日

(南相馬市、復興支援対策職員だった高野真至氏の体験談を聴く)

1月16日

(川内村+富岡町サロン) お雑煮、スポーツ民謡

11月8日

郡山市・川内村・富岡町仮設サロン開催) きのことカレー+サンタクロースづくり

1月26日

川内村・富岡町サロン) お汁粉+煮物

11月23日

(郡山市・川内村・富岡町仮設サロン) 炊き込み御飯+サンタクロースづくり

2月27日

「被災者支援あり方研究会」元南相馬市復興対策課職員・高野真至氏の証言

『東日本大震災…災害対策の裏側で、何がおこっていたか』（明治大学リバティータワー）

大きな災害の対応に追われた職員の虚脱感や、体調不良また家族問題などの理由により、休職・退職者が続出した。対応職員の健康な体制なくして、被災者を守ることもかなわない。被災者支援の第一は「職員の体制を確保すること」。毎日「明日はやめよう」と思っていた。

3月11日

「被災者支援のあり方検討会・（中野と福島の会・パネル・ディスカッション「あの時」）」

東京に直下型地震が襲うといわれているが、この震災から何を学んだか…」

3月16日

「被災者支援のあり方検討会」高野氏講演会のこと、南相馬ファクトリー調査訪問のこと。

3月21日

郡山市川内村・富岡町サロン（春野菜スパゲッティと尺八お箏の伴奏で合唱）

実践と研究会を繰り返す中で、更に様々な課題が見えた。研究を継続したかったが、叶えられなかった。そこで、6月19日当会の当法人総会に福島大学清水修二先生をお招きして講演会『東日本大震災を越えて～これからの福島と日本』を開催し、研究を終了することとした。

## 事業の成果

東日本大震災の発生に、当法人は【NPO 活動を行うものにとって、目をつぶってはいけなし】と決議し、災害発生から5年間を被災地支援活動を中心に取り組んできた。特に原発事故という未曾有の災害に、職員側も「どのように支援して

よいか…情報も得られないままに、対応するしかなかった」と証言している。これまでの支援はどうであったのか、このような住民の暮らしを根底から壊されてしまうような事態が起きた時、どのような支援をしなければならなかったのか…考えておく必要があるのではないかと考え、この実践研究に取り組むこととなった。

この6年間に分かったことは、この大きな災害に「なぜ怒りを発しないのか…」と不思議にさえ思っていたが、福島県全体が産業らしい産業もなく、原発に頼り切った暮らしをし、原発にあまりにも大きな恩恵を受けてきたという事実である。この研究の難しさ…住民からの聞き取りが十分には行えなかった原因が、ここにあったのだ。少ない聞き取り時間の上に「プライバシー」という言葉で、行政も、当人も多くをかたらない。仮設の集会場でも、表面上は笑顔を見せているものの、心からの笑顔ではない。

この6年間に被災者たちに起きたことは、それまで他人に見せていた表面的な暮らしではなく、家族内で、そっと触れないように暮らしていた家族問題の全てを見せることになった。それは震災問題とは別の部分も多く、あまりに多岐にわたり、時折出かけて話を聞く程度ではとても聞き取れるものではない。数少なくしか聞き取れなかった事例にそれが十分に表れる結果となった。

ただ、今年度中には全仮設が解体されるという6年目を迎えて、新たな暮らしを決定するしかない状況に、追い込まれた未だ仮設に残っている高齢世帯の人々が否応なく決断を迫られ、恥も外聞もなく語り始めている。そのような状況になって初めて力のない住民同士の小さいけれども本当のささえあいが生まれていると感じる。多く、迎えてくれる家族もなく、暮らしていくしかない姿を互いに見せあって、今ようやく真の繋がりを大切に暮らす人々を支援したいと感じている。

## 成果の広報・公表

震災後 5 年以上も被災地に通い、概ね毎月開催してきたサロン活動を通して、多くの被災者と話をしてきた。しかし、上述したように、十分な話が聞けるようになったのは最近のことと感じている。事例としての記録はすくないが、この間に私たちは『東日本大震災が福島』問題としてだけでなく、日本の抱える大きな課題であり、「風評やマスコミに左右されることなく、正しく理解し、正しく伝えなければならない」と考え、経済・経営学の立場から福島・原発の課題に取り組んでこられた・福島大学特任教授・清水修二先生の講義をお願いしながら、この研究を続けてきたので、当初の目的の事例のみならずこの講演記録も含めて「報告集」を発行したいと考えている。

## 今後の展開

法人内で 2016 年度の活動計画を検討したが、この実践研究は未だ途中であり、サロン活動は仮説に住む人々からの要望もあって、継続する必要があると決まり、今年度も引き続き郡山サロンに通っている。活動としては、今まで通り料理・会食が主体だが、今年度は未だ帰還できない富岡町住民が主体になると思われる。

特に手芸活動の中に、福島伝統的工芸品である藍染を取り入れた手芸活動を積極的に行うことを考えている。法人として、郡山市中央公民館と連携してボランティア講座を開き、ボランティアにも参加して頂き、郡山市民とつながりができれば、郡山に残ることを考えている人々の力にもなると思う。

藍染作品作りが富岡町民としての自負心をもって、老後の生き甲斐として生かされるように願いつつ活動に当たり、事例も増やせれば幸いと考えている。